



住吉歴史資料館の事業と阪淡路大震災25年

内田, 雅夫

(Citation)

歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集, 18:5-11

(Issue Date)

2020-02-02

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012136>



住吉歴史資料館

住吉歴史資料調査会

〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町 7 丁目 1-2

本住吉神社御本殿西

令和 2 年 1 月 16 日

住吉歴史資料館の事業と阪神淡路大震災 25 年

住吉歴史資料館

神戸市東灘区住吉に所在。阪神淡路大震災復興と本住吉神社鎮座 1800 年の事業として平成 13 年（2001）に財団法人住吉学園が本住吉神社神主家の屋敷を再建したが、その一部を住吉歴史資料館として展示室、会議室、並びに座敷（二間十六畳敷）を作り、神社資料並びに神主家所蔵資料をもとに開館した。

平成 21 年（2009）に現在の資料収集、研究体制が加わった。この体制はボランティアであり、現在 6 名、全員が住吉在住である。うち 3 名が住吉生え抜きである。神戸大学大学院人文学研究科と連携覚書を結び毎木曜日に研究員の先生に来て頂き古文書の翻刻並びに全般指導を仰いでいる。

但し、諸事情で、住吉学園による事業費等の予算措置は現在停止している。

スローガンは「再発見！菟原住吉、昔を未来へ」。神戸市東灘区住吉町の成り立ち、生い立ちを調べて、小学生、中学生を含む町民のみなさんに紹介し、この町のすばらしさを知ってもらい生活を豊かにしてもらうことが目標である。

ひとことでいえば、地元で埋もれている資料を発掘して収蔵整理し紹介アピールすることである。この体制で 10 年になり、資料館の存在が町内近隣へ浸透してきた。古文書、絵図、古書、新古写真が発見提供され貴重な所蔵資料となっている。また古老への聞き取り調査も行い、町内の住吉小、渦が森小、住吉中への出前授業も行っている。

現在取り組んでいる主要テーマは江戸期の豪商、「灘住吉の吉田家」の事績を明らかにすること（歴博、神戸大等諸大学機関との共同研究のお手伝い）、日本一の富豪村と言われた 1900 年代の住吉村・御影町のこと、並びに阪神淡路大震災の復興と教訓の子供たちへの言い伝えなどである。

大震災 25 年に思う

住吉歴史資料館の主要テーマの一つ「大震災復興と教訓の言い伝え」について今は岐路にあることを憂慮している。この場を借り報告したい。

地域がしっかりしているところは復興も効率的で速いなどと、よく言われる。資料館の地元、東灘区住吉地区の 25 年前の復興は、取り巻く自然環境、その中での暮らしぶりをもとに、地元の人たちが知っている知恵をだし、出来ることを出来る人が行う方式であった。それは必然的かつ自発的で、過去の災害時もそうであったであろうと思う。

詳しくは、住吉歴史資料館発行の『阪神淡路大震災資料集 住吉の記憶 I～III』でまとめた。神戸大学の奥村弘、佐々木和子、水本有香、山崎善弘そして加藤明恵の各先生方のご指導とご執筆の賜物である。

地元民には何気ない知恵、処置が、地元ならではの最適な手法であることを強く指摘して頂き、普通なら忘れ去られるものが記録として残すことができている。

町内を貫流する用水路の利用、炊き出しの実行、日ごろの人間関係をもとにした情報

住吉歴史資料館

住吉歴史資料調査会

〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町 7 丁目 1-2

本住吉神社御本殿西

共有など、言われてみれば、そうなのだなあと納得したものである。

さて、大災害が再来するといわれている。またまた甚大な被害を蒙ったら、どうするか。25年前の大震災を含め、過去の記憶を活かした復興手法が採られるはずであるが、果たして、それは可能であろうか。

結論は25年前のような機動力はもう無理と思わざるを得ず、行政に依拠した最大公約数的な最適手法にならざるをえないと思う。

なぜノーなのか。以下、地元東灘区住吉町民の誇り「だんじり祭」の25年の変遷を見ることによって考えてみたい。

唐突と思われるが、だんじり祭は、地域の自然、成り立ちに根差した運行がなされており、25年前、その運行手法が無意識的に復興に活かされたといえるからである。今考えると、災害復興の予行演習を毎年5月に行っているようなものだったと思う。

だんじり祭

旧暦六月晦日（太陽暦8月上旬）の大祓祭にその淵源をもつ5月4日、5日の本住吉神社の例大祭で、氏子各地区から12台（住吉は8台）のだんじりが曳き出され皆が打ち興ずる。4日は町引きといい、氏子各地区をだんじりがにぎやかに廻る。5日は本宮で、住吉町内を8台のだんじりが揃って巡行し午後7時、神社の南1kmにある御旅所に集結し江戸末期に定められた順序に従って1台ずつ「宮入」する。

だんじりを引く人たちを「若中（わかなか）」といい、その顔は輝く。今も25年前も変わらない。

だんじり祭の震災後

祭は年々、盛大になって来ている。いったい何が25年で変わったというのか。そして、それが、震災復興手法とどのような関係があるのか、である。

劇的に変わっている点がある。人が変わった。よその人が増えたのである。結果、神事であるとの自覚が薄まり自制が緩み、余興、発散の手段と化しつつあることである。

だんじり祭の奉仕者

だんじりは人が動かす。力が合わないと動かないし、疲れる。指揮系統がはっきりしており運行責任者である若中帳頭（わかなかちょうがしら）以下、副頭（副責任者）、会計が執行幹部で魔除け七色の糸で編んだタスキを掛ける。祭礼の期間中は町内会長より帳頭のほうが上位に立ち決め事を判断する。補助するのは世話人で、経験を積んだ年長者が勤める。運行上の危険を予知し避け、けんかの仲裁をしたり、だんじりが他の町内に入るときは挨拶をし、祝儀の受け渡しをしたりして執行幹部を助ける。

実際にだんじりを動かすのは若中の若い人たちで、腰巻、ジンベ、白地下足袋の出で立ちで前後の棒端（引き手）、屋根方（立ち木の枝除け、提灯のお守り、ろうそくのメンテ）、囃子方（太鼓、半鐘、摺り鉦、小太鼓）を担当する。

住吉歴史資料館

住吉歴史資料調査会

〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町 7 丁目 1-2

本住吉神社御本殿西

小六まではだんじりの前に延びる「前綱」を引き、中学から若中扱いとなる。まず後の棒端で引き、センスにより囃子方、或は屋根方に廻る。運行の指令は全てウチワで行う。経験を積むと世話人に指名され長い浴衣、襦袢に麻裏草履が許される。そして、いずれ、ハレの帳頭指名が来る。

総勢で約 80 名くらいはいる。それにまかない方の女性を加えると 100 名は超す人たちが 1 台のだんじりを動かすのに力を合わせる。他地区のだんじりに負けられない。

かつては、一家総出で参加した。お父さんは若中の世話人、男の子は、若中の屋根、棒端、或は囃子方で奉仕し、奥さんはまかない方でお手伝いする。5 月連休は何をしようかなと考えるが、地元民にとっては、祭の何を分担するのかな、の意味になる。

近年は、新しいひとが増え、これらの人にとっては祭は 5 月連休の遊びの一つのオプションである。祭参加、遊園地、旅行など遊ぶ手段には事欠かない。

運行責任者（若中帳頭）や世話人の悩みは人集めと安全運行である。

ネットの普及で祭り好きのひとたちが横の連絡を取り合い毎年参加してくれるのは大きな救いで有難い。

女子の参加も華やかで有難いが男子の気が散り、危険は確実に増大する。もし、顔にけがでもされたら、と帳頭は気が気でない。

地元はえぬきの人たちが祭の意味や運行を肌で知っているひとたちが少なくなり、新しいひとが主体となると否応なく祭は変質していく。面白い、楽しい祭にしないと引き手は来てくれない。盛り上がって、感動させ、来年も来ようと思わせないといけない。

町引き、だんじり囃子

町引きは、だんじりを町内の隅々にまで引いて持って行き、お囃子の太鼓、カネ、半鐘の大きな音で悪霊・疫病を退散させてしまうと考えると理解しやすい。

囃子方の太鼓手は町内の坂道、狭い道、危険な道などを熟知しており、だんじりがその箇所を通過するときは、お囃子の調子を変える。音の強弱、大小、テンポなど自在に操り、引手の棒端方を合力させ大きな馬力にする。登り坂などで引手が疲れていると感じたら、単調に、力強く、ゆっくりと打ち方を変える。

夜の巡行でも問題ない。太鼓手は町引きルートのカセを熟知しており、外を吹く風の匂いで今どのあたりを巡行しているかわかるし、水路が流れておれば、その水音でも場所がわかるという。

囃子方は先輩から、オマエらは神さんの声を聞いて太鼓の打ち方に反映し、だんじりを引きやすいようにするのが役目だと教えられたという。「神さんがオマエに乗り移っているのだと思え」といわれる。かくして安全運行が確保できる。

近年、町引きは不人気である。通り一辺に地区内を通過するだけで、隣の地区のだんじりと示し合わせた「掛け合わせ」など派手なパフォーマンスに流れる。町引きは地味でギャラリーも少なく張り合いがないのだろう。新しい人にとっては、歩いたこともない地元の知らない道を引かされるのである。町引きはシンドイ、白けるのである。

住吉歴史資料館

住吉歴史資料調査会

〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町 7 丁目 1-2

本住吉神社御本殿西

囃子方、特に太鼓手の技量が低下し、町引きの際の臨機応変、緩急自在の打ち分けがもうできなくなっていることもある。だんじり同士の「掛け合わせ」では、単調だが力強い「宮入ばやし」を打っておればそれで盛り上がる。ギャラリーの歓声も大きい。

祭礼を支える裏方女性

女性は、町内自治会館に陣取り、まかない方を担当する。長年、基本メニューは決まっており、何日も前から下ごしらえなどが始まる。

家事の合間を縫って、会館にあつまり、メニュー担当を決め、てきぱきと処理する。一回 100 名を超す昼食、夕食、そして休憩時の腹ごしらえ食など、食事が出来あがっていく様は壮観である。伝統の煮しめ、握り飯に加え、サンドイッチ、とんかつ、唐揚げ、カレー、関東煮なども出てくる。蒨（ふき）と筍（たけのこ）の煮しめは名物である。

かつては、だんじり運行に女性が参加することはなかった。地元の娘さんは出たい、出たい気持ちを地団駄踏んで我慢し、まかない方に廻る。嫁いできた奥さんは、まかない方で婦人会デビューである。「どこそこのお嫁さん」という言い方で品評がなされる。若い嫁たちも負けていない。嫁同士が婦人会ジュニアを結成して親睦を深め、主的ボスの弱点を共有して攻め、作業効率を保つ。

まかない方の女性たちが、奇麗に飾り付けられただんじりを目にする機会は、自治会館の前をだんじりが通るときくらいである。

その時は、エプロン姿のまま会館前にでて、通り過ぎるだんじりを拍手で見送る。

しかし、見逃さない。今年の帳頭の人望はどうか。うまく引けているか。お囃子はちょっと下手だな、とか一瞬で見抜く。女性になめられると、まかないの味が変わる。

一方、屋根を見上げて、「あれはどこの子や」、「XX さんとこの下の子や」、「もう屋根に乗る歳になったんか。ええ若い衆になったもんやな。」、「上の子は、前の棒端で引いとるわ」といった調子で、町内の子供たちの成長具合も把握する。

この間、10 分もない。急いで炊事場に戻る。夕食の天ぷら揚げはまだやっと半分だ。

この雰囲気こそ町内の人たちの和であり「町引き」の醍醐味なのである。

近年は、子供会のお母さん方も参加してくれるが、マンション住まいの新来の客である。おにぎりを握れないお母さんもいる。もちろん、如才ない女の世界、そこは、教えてあげる。殆どのお母さんは子供が六年生を了えると、「子供の思い出づくり完了」と来なくなる。その中でも、残ってお世話をしてもいいという人を探すのである。地元の「お嫁さん」は数えるほどである。

だんじり祭の問題点は災害復興にあたっての問題点ではないか？

さて、だんじり祭の運行方法と近年の変化つき述べてきた。

だんじり祭が地元根差した楽しい、神々しい行事として続いて行くのか、また、行けるのかの問題を考えると、これは、大災害が発生したら、足が地に着いた対処、復

住吉歴史資料館

住吉歴史資料調査会

〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町 7 丁目 1-2

本住吉神社御本殿西

興が出来るのかの問題を考えるのと、実は、問題の根は同じなのではと思う。

だんじりの運行を毎年行っているからこそ大震災に際して対処できた事も多い。

一旦、大災害が発生すれば、自動的に持ち場、役割を知って人が集まってくる。それは無意識に祭の寄り合いに会館へ集まってくる心持ちであろう。町内を知り尽くし、役所とのパイプを持つ人たちが、対策を練る。自動的に地元災害対策本部が立ち上がる。そして日常のこのように色々な対応がなされていく。

- だんじりの町引きを通して、風の匂いで場所を知り、水音でどこをどう運行しているかが分かる太鼓手のような人たちいてこそ、大災害に際して、断水してしまっている避難所前まで水路を繋ぎ、導き、トイレ用の水を手に入れたりできる。
- 町内を遊び場として走り回り水路の急流に笹舟を浮かべ競走させた子供たちが若い衆になりだんじりを引いてこそ、大災害の断水下、火事が発生しても、若中を引き連れ、火事場と近くの水路の間に若いひとを部署してバケツリレーで消し止めたりすることが出来るのである。
- 町引きするだんじりの屋根に乗っている若い衆を見て、ああ、あの子はあそこの子だ、もうあんなに大きくなってなあ、とわかる町内があり、人間関係があつてこそ、大災害でも、デマに惑わされず、自分たちの常識を判断の基準として飛び来る情報の善悪、取捨が判断できるのであろう。
- 大災害で炊き出しが必要となっても、祭のまかないを急にやれといわれたようなものだと観念し落ち着いて処理する婦人たちがいる。そして、200人分くらいなら食器までそろっている心強い町内の自治会館がある。
- 区役所や保健所の対策本部の職員さんとは日ごろから自治会活動を通じて顔なじみ。必要物資の食料、医療機器、薬剤、各種届け、証明書の手配、機材の手配でもホンネでものが言え入手できる。それらを瓦礫で通れない道路は巧みに避け最短距離で自治会館まで運び、婦人会と協力して処理し避難民に供用する。

災害復興対策の最大の問題点は、繰り返すが、住んでいる人が変わってしまったことであろう。東灘区は人気住宅地でデベロッパーがマンションを新築しても売れる場所柄である。一方、若いひとは住コストが高くもう住めなくなっている。

東灘区人口 21 万人の 7 割は新来の人と見られ、地元の方は 3 割程度で、祭を家庭の年中行事と感じている土着民となると 2 割にも満たないのではと思う。

大災害の復興のベース、これは、上で見たようにだんじり運行のベースである経験・知恵でもあるのだが、これを持つ地元の方が極端に少なくなっているのである。

身近な例では、『阪神淡路大震災資料集Ⅱ 住吉の記憶 住吉西区と阿彌陀寺』を発行した後、何年もたたないとき、資料集に対する感想や補足を聞く自治会館での座談会開催を打診したところ、町内会の元会長で元青年団長さんは、「アンタらの大抵の要望はきけるが、それはもうムリだ、みんな散ってしまって人は集められないのがホンマのところだ」といわれ暗澹たる気持ちになったことを覚えている。

住吉歴史資料館

住吉歴史資料調査会

〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町7丁目1-2

本住吉神社御本殿西

大災害が起こったら

祭になると若いひとを中心にだんじりが引き出され、地域がしっかりしているといわれている東灘区の各町だが、実は上で述べた実態にある。

もし今、大災害が発生したらどうなるか。町内に災害経験を持っている人、動ける人が少なくなり、地元発の適確な応急措置はもうとれないかも知れない。

そんな状況下では、否が応でも土地勘のない新しい住民が勇気を出して動かざるを得ない。役所と慣れない交渉をして役所の指導で出来る方策を実施していくことになるろう。

書き残した記録類がある

しかし、東灘区の旧町村では災害の教訓をまとめた記録類が存在する。

武庫郡住吉村発行の『昭和十三年大水害誌』並びに『住吉村誌』災害編、そして、住吉歴史資料館発行の『阪神淡路大震災資料集』のⅠ～Ⅲ、並びに、それらを集大成し災害年表を付した『わたしたちの住吉』災害編などがある。本山村、甲南学園などでも大水害に関してまとめた著作がある。これらは昭和十三年の大水害以来、甲南学園創立者平生鈞三郎の唱えた「常ニ備ヘヨ」を基本的な考え方として編纂されている。

災害経験のある人はいなくなっても、これらの冊子を活用すれば、災害の歴史を知り、過去の大災害の対処法を知る事ができる。新しい住民であっても経験を持つ地元民の目線での知恵を持つことができるのではと思う。

そして、役所の防災減災の動きに連動し、更に防災専門家にこれら冊子を示し、意見を徴し、各地域なりに復興の手法のシミュレーションを作っておくことは可能である。それらを地道に進めて行くことをまず、考えたい。

災難に逢、死ぬ時節には死ぬがよく候

基本的な心構えとして自然に対してもっと謙虚になるべきである。災害は防げない。いくら予算をつぎ込んで災害対策をしても、想定外のものが来れば、それまでである。国土強靱化ではなく人間の心の強靱化ではないか。

江戸時代、1828年の新潟越後の「三条地震」に際して、良寛和尚は、その温和なイメージとは対照的な上の激越な言葉を被災した極めて親しい友人への手紙で述べている。「諦める」は「明きらめる」で「無常の現実」を「明らかに観る」との意という。

人知の限り対策したあとは自然に委ねようではないか。人は死ぬときには死ぬ。そのとき、どんな生き方をしてきたのか。よろこんで死ぬるかという心の訓練、日頃の生き方を充実させるほうが人間として謙虚で美しいのではないかという考え方である。

かつての日本人はそうであったといわれる。『昭和十三年大水害誌』にもそのような記述「この秋は雨か嵐か知らねども今日の務めの田草とるなり」が見える。

平生鈞三郎の説いた標語「常ニ備ヘヨ」の真意は、「心構えこそ最強の防災対策である、しっかり持って日々を暮らせ」であろう。

以上

住吉歴史資料館

住吉歴史資料調査会

〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町7丁目1-2

本住吉神社御本殿西

昭和10年5月12日午後7時頃 本住吉神社へ宮入する

野寄地区のだんじり 近郷随一の豪華のだんじりだったが昭和20年空襲で焼失。

左は既に宮入の終わった仲区のだんじり。



本住吉神社宮入り（昭和10年頃）